

# 奴田山（青木山）・・・その山名について考える

会津大学短期大学部

名誉教授

渡邊 幸夫

## 奴田山（青木山）・・・その山名について考える

渡邊 幸夫

平成24年1月10日受付

【要旨】会津平の青垣山々のひとつ、奴田山（青木山）は会津百名山の一座を占める里山である。その昔この山は小田山城の一角を占めたことから、会津葦名氏（三浦氏）とも係わりがある。三浦一族の本拠は相模の国の衣笠城であるが、その他に奴田城（怒田城）や佐原城があった。そこで奴田山や荒佐原山の名は三浦一族の城のそれに由来するともいえよう。しかし「奴」の意味は蔑視や蔑称に繋がることから、なぜ奴田山と称したのか、不自然であると考え。また奴田山はかつてヒダラハゲヤマや上ホシ山とも呼ばれたとされるが、この山名と山座同定についても疑問が残る。昨今はこの山麓の歴史や民俗を紹介する活動が盛んな折から、これらの疑問に挑むことは意義があると考えた。以下に本稿を要約する。

1. ヌタとは湿地を意味する言葉である。奴田・吹矢山系を挟む東西の地域には湿地がある。資料として新編会津風土記の大巣子集落項に、ヌタノ原山との記述がある。また門田の条里制遺跡発掘調査から2種の田下駄が発見された。これを裏づけとし奴田山の名は湿地とそれに伴う辛い労働の場を意味すると考える。
2. 奴田山は本来、奴駄山（ヌダヤマ）であって、その読みはドタヤマではない。
3. 古地図と地形図（2.5万図）との照合から、ヒダラハゲヤマや上ホシ山は何れも奴田山ではない。
4. 高知県にある大峰山山頂の字名が奴田山であり、国内で唯一同名の山であると推察する。  
奴（怒）のつく山や地名は全国的に幾つか存在するが、その多くは標高1000m未満の里山である。
5. 山伏塚と妙見信仰については馬の守護神との関連をも検討を要する。
6. 上ホシ山のホシはボウ示<sup>じ</sup>の転訛とも考えられる。ボウジとは領地（所有地）の境界を意味することから、上ホシ山の名の意味は尾根上にあつて、土地境界の目印となる峰を指すと推察する（仮説）。
7. 上ホシ山の「上」が「神」と当て字関係にあれば、神ホシ山となる（仮説）。
8. 仮説6と7とをさらに推し進めれば、上ホシ山は境界尾根上に位置し、その峰や山腹に山神（青木集落の麓山神社）の祠が祭られていた可能性も生まれる（仮説）。
9. 奴田山山麓での「三ツ石」が火の神（荒神）と関連するか否かは不明であり、今後の課題として興味深い。

## はじめに

中高年の体力作りを目指すハイキングや里山歩きが推奨されて久しいが、これに先駆けた本県の事業（平成8-9年度）には会津百名山選定がある。その成果は書籍刊行により公表され<sup>1)</sup>、現在でも時折問合せが会津保健所へあるほど県内外から反響を呼んでいる。

会津百名山の一座を占める奴田山（ヌタヤマ、青木山）は会津若松市の東南に位置する里山であり、かつて山麓の人々が糧を得るための労働の場であった。また戦国時代には小田山から峰続きである奴田山一帯が山城であったという<sup>2-5)</sup>。

この里山を新編会津風土記では干鱈元（ヒダラハゲ）山と呼ぶ。その一方で地形図（2.5万図）には奴田山と記されており、さらに市井では青木山という。地元で呼び習わす名と地形図のそれとが異なる例は他にもあり不思議な話ではない。しかし青木山周辺の歴史や民俗を紹介する活動が盛んな昨今、最新といえる文献<sup>6-8)</sup>を読んでも奴田山に関する名称の意味やその由来が不鮮明である。加えて同名の山は他にないとする事にも疑問がわく。そこで奴田山の名（ヌタの意味）を明らかにし、他に同名の山があるか否かを探ることは意義があると考えた。

### 文献<sup>6-8)</sup>から抜粋

青木山を地図上では奴田山（ヌタヤマ）と呼んでいるが、なぜそう呼ぶのか、誰に聞いても地名辞典で調べても、全国的にみてもそのような地名も山名も見当たらない。ニタラハゲ（干鱈元）とは棒タラのことで、青木山の地形を遠くからみると棒タラを剥いだような地形に見える。山の名をその地形から呼ぶのは自然な呼び方であろうし、昔の会津の人が郷土の名産である棒タラにあやかって「干鱈元山」と呼んでいたのは自然な呼び方であろう。それが明治9年に編纂された地図には「上ホシ山」と記されている。なぜか、さらに「奴田山」と呼ぶようになったのは何時頃から誰によってか、などと詮索するとなおややこしくなる。

なお新編会津風土記からヒダラハゲ山が正しい（筆者註）。

### 文献<sup>6)</sup>から抜粋

青木山は古くから「労働に従事する」場所であった。それで「奴田」という言葉が当てはめられてきたのかと思う。それにしても「奴田」と書いて、ヌタとは読まない。ヌタとは「沼田」とも書くので、「奴田」は「沼田」（湿地）の間違いなのだろうか。

さらに傾聴に値するとして笹川による3項目から成る説を上げている。

- ① 青木地区の住人は成田の姓を名乗っている人が多い。
- ② 自分の故郷の名に奴などという蔑称を使用するのはおかしい。
- ③ おらが山（成田が山）という意味で、成田山というべきところをはまって奴田山というようになったのではないか。

## 論考

奴田山の名称由来を検討するには歴史のみならず風俗や習俗など庶民生活に係わる視点も必要である。はじめに歴史上小田山城主であった葦名氏（三浦氏一族）に触れ問題解決の糸口とする。

## イ 三浦一族との関連

小田山城は会津葦名氏（三浦一族）の砦（詰城）である。この城は小田山地区と荒佐原山（あらさわらやま）・奴田山（どたやま）地区に分けて築かれたという（鎌倉時代末に小田山部分、南北朝時代に奴田山地区、その後に荒佐原山）<sup>5)</sup>。三浦氏の本拠は相模国（三浦半島）の衣笠城であるが、他に奴田城（怒田城、横須賀市吉井）や佐原城（横須賀市佐原）がある。そこで奴田山や荒佐原山の名称は三浦一族の奴田城や佐原城のそれに由来するとも推論し得る。本来の奴田城（怒田城）は平安時代末期の地形を活かした要害であり（築城者は不明）、また佐原城は佐原義連により築城されたという。

なお「奴と怒」とは当て字関係にある事に加えて、奴田（ぬたやま）の呼名が「どたやま」か、さらには「ぬだやま」か、何れが正しいかなどの点は興味深いので後に触れたい。

## ロ 庶民生活と民俗学的諸因子

庶民生活は昔ほど過酷な肉体力労働の下に営まれ、その一方で風俗・民間の習俗・民間伝承・修験道などの影響を根強く受けた。これら諸因子が山の名称にもその痕跡を残している事実を、奴田山に隣接する山で確認することは意義がある。それには奴田山の南方、尾根続き上の吹矢山（819.8m）が相応しいと考えた。

日本山岳ルーツ辞典による解説では、フキヤとは山峰が“矢を吹いた形”、つまり尖端が鋭く尖った形をしている山だとする<sup>9)</sup>。しかし吹矢山の山容はなだらかであり、地形図（2.5万図）を読んでも明らかに尖峰ではない。滝澤峠の近くにも吹屋山（491m）があるが、この山容も険しくない。

吹矢山（朝日鉦山、門田石村）と吹屋山（石ヶ森鉦山、金堀）は共に会津の古い金山である<sup>10)</sup>。採掘した鉦石を選鉦し金属を得るには火力を必要とする。鉦石を火に投げ、その炎色から金属を分別し、かつ溶融させる工程を経る。そこでこの山の名称は鞆を用いて火を吹き作業することに起因するといえよう。「矢と屋」は漢字が異なるが、両者は読む音が同じで当て字関係にある。本来の「ヤ」は鞆を設けた作業小屋の「屋」を示すと考える。民俗学的な解釈ではないまでも、当時の「庶民生活の状況（ありさま）」を念頭におくことは極めて大切であり、文字の解釈ばかりでなく他の論拠があればさらに良い。

なお吹矢山はその頂から十字の方向へそれぞれ路があり、十文字山ともいわれた。北は青木、御山方面。東は川溪、大巢子方面。南は大巢子、黒森方面。西は堤澤、面川方面である。

## ハ ヌタとは何か

文献11～13によれば、ヌタとは地名や湿地を指すもので、沼田・怒田・奴田の他に埜（国字）がある。村石らは奴田山をやっこだやまと呼び、ヤツ・コとは地形語で谷をもつ山とする。谷地（ヤチ）とは沢の湿地をしめす。関連して谷戸（ヤト）は低平な丘陵地において浅い谷が樹形状に切れ込んでいる地形であり、ヤトのほかヤツ（谷津）・ヤチ（谷地）ともいう。なお地名や地形表現として北関東から東北では「谷地」、千葉では「谷津」とい<sup>47)</sup>、ヤトは主に関東地方に多い。多くのヤトでは上（カミ）から下（シモ）への湧水による小川がある。

「奴田」が「成田」に相通じるとする前述の笹川説があるが、奴田の読みが「ヤッコ」または「やっこだ」であれ、それは湿地を意味する。奴田山の名称には湿地であることと、同時に糧を得るための生活の場（過酷な労働）を意味すると考える。

## ニ ヌタの痕跡を探す

仮に北から南に走る山稜を奴田・吹矢山系として、この山系を東側（川溪、大巢子、一ノ渡戸）と西側（青木、

御山、堤澤）との地域に分けて考える。東西の集落は峰越しに通じ、かつて生活物資をはじめ婚姻や縁戚などを通して交流があったことから、風俗や習俗の点でも深い関連がある。この状況の下に東西からヌタに係わる痕跡を探すことは興味深い。

### ◎ 大巢子集落（奴田・吹矢山系東側）

奴田の「田」に注目し農耕し得る地形を探すと、大巢子集落の西および西北部が目にとまる。この地域は他集落（川溪、一ノ渡戸）より概ね広く緩やかである（東山ダム建設以前の地図参照）。そこで大巢子集落を中心に調べたところ、以下のように新編会津風土記および東山おおすごスキー場の広告紙にその鍵を見出し得た<sup>14, 15)</sup>。

#### A 新編会津風土記（大巢子村の山川の項）の記述<sup>14)</sup>。

I 「ヌタノ原山、村南五町ニアリ、東ハ一渡戸村ノ山ニ連ナリ、南ハ黒森村ニ界フ」。

奴田山とヌタノ原山における「ヌタの意味」は同じであり、それは湿地を意味する。しかし地形図では大巢子集落周辺に「ヌタノ原山」の表記が見当たらない（地形図2.5万図、若松と上三寄）。

改めて新編会津風土記を参考に地形図を読み大巢子集落の南方にヌタノ原山を探すと、標高記載の峰（825m）と無記載の2峰（830mと840m、西方に凹地あり）がその候補に上がる。何れも無名峰ながら緩やかな山容であり、地形的に原（ヌタノ原）と呼ぶに相応しく、その背後には萱野山（860m）が控える。

新編会津風土記に記された村南5町（およそ水平距離545m）を重視し、その位置的根拠からみて ヌタノ原山とは標高記載の峰（825m）だといえよう。この理由を以下に示す。

- ① 「ヌタノ原山、東ハ一渡戸村ノ山ニ連ナリ、南ハ黒森村ノ界トナル」と記された位置関係に注目する。
- ② 地形図上で大巢子から825m峰までの距離は南方およそ水平距離で500mと読める。
- ③ 一方の830mと840m峰は村の南西方向にあり、集落からの水平距離もそれぞれ1000mと750mほどある。記載された測量上の正確さ（精度）が問題となるが、距離は不正確であるとしても、その方角が合致しない。この点に関し19世紀初期における方角測定は正しいものといえよう。
- ④ 等高線は10m間隔であることから、後述の845m峰は840m峰を指すと考える。

II 「箕輪山 村ヨリ申ノ方四町余ニアリ、南ハ黒森村ニ属ス」。

箕輪山は大巢子集落から西南西の方向におよそ440mに位置する。従って箕輪山は地形図上での標高685mと記された峰といえる。

#### B スキー場の広告紙<sup>15)</sup>

広告紙には奴駄平（ぬただいら）・谷地平（やちだいら）・霜降（しもふり）などと称する初級および中級ゲレンデの表記がある。ゲレンデは830m峰を主に設置されており、その右側に845m峰の記載がある（何れも無名峰）。この奴駄平の名称は新編会津風土記に記されたヌタノ原山に由来すると考える。なおスキー場は昭和63年12月に開設、その後閉鎖されている。

地形図では大巢子の北から西の方角に田畑や沼および荒地の記号がある。この一帯は湿地と考えられ、生活の場（棚田、焼畑、秣刈、萱場など）であった事が覗える。

加えて奴田・吹矢山系東側に位置し、東山ダム建設のため水没した川溪集落には奴女（ヌメ）入という地名があった<sup>51)</sup>。ヌメリ（滑り）とは濡れてぬるぬると滑る、ぬらぬらすることで、科学的には粘塑性物体（粘塑性

物体)の表面に触れた際に、その官能的感触を表現する術語である。「ヌメ入」が「滑り」と当て字関係にあり、「入」の「イ」が脱字したとすれば、「ヌメリ」となる。この推論から湿地の土質(泥土や粘土など)の物理的特性がその土地の呼び名(地名)になったとも考えられよう。次に奴田・吹矢山系の西側からヌタの痕跡を探す。

◎ 門田条里制遺構と田下駄(奴田・吹矢山系西側)

近世まで会津における農耕は主として水に恵まれた沼地や湿地で行なわれていた(補足参照)。門田条里制遺構とは奈良・平安時代の土地区画の跡である。門田町御山字村下地内を発掘調査したところ、出土品の中に2種の田下駄が発見された<sup>16, 17)</sup>。これは「輪カンジキ型」と「ナンバ型」の田下駄であり、佐々木はそれらを代踏み用と推測している。田下駄は泥湿地や深田で農作業をする際に用い、その用途から2系統ある。両者とも泥中に足の沈下を防ぎ作業を楽にする履物である<sup>18, 19)</sup>。

稲の栽培は埋蔵水田の調査(プラント・オパール分析)から判明した<sup>20)</sup>。枯死した植物中の珪酸体は土壤中に微化石として半永久的に残る点に着目するのがプラント・オパール分析法である。これは先ず微化石の組成や量を基にイネ科栽培植物を同定し、さらに古植生や古環境を調べる。次にこれらの結果を基に調査地帯が概ね湿った環境であったか否かを推定するものである。

奴田・吹矢山系を挟む東と西からヌタに関する痕跡について論じたが、スキー場広告紙にある奴駄とは田下駄に由来し、さらに推し進めて奴田山は奴駄山であったと考える。この論拠は新編会津風土記(ヌタノ原山)の記述と門田条里制遺構出土品の田下駄にある。

ホ 奴田や奴(怒)の名称がつく山は他に存在しないのか

国内では地名を加えると推定30箇所以上存在するが、このうち山に関してのみ記す。

名称	所在地	備考
火奴山(ホドヤマ) <sup>22)</sup>	福島県只見町	1375 m
ヌカザス山 <sup>42)</sup>	東京都奥多摩町	1302 m
奴田ノ山 <sup>21)</sup>	高知県土佐町南川	1093.5m
ヌタノ原山 <sup>14)</sup>	福島県会津若松市東山湯川	825m 無名峰と推察
奴可難山(ヌカナンヤマ) <sup>43)</sup>	北海道下川町・風連町	784m
ヌタノ丸 <sup>22)</sup>	神奈川県相模原市緑区	775m
ヌダノ峠 <sup>22)</sup>	愛媛県上浮穴郡久万高原町	660m
怒塚山(イカリヅカヤマ、ドツカヤマ) <sup>43)</sup>	岡山市・玉野市	332m
大峰山(奴田山) <sup>23)</sup>	高知県香美郡夜須町	202m
奴(怒)田(ぬだ) <sup>24)</sup>	千葉県君津市奴(怒)田	小規模な城、もしくは砦
奴田城(怒田城) <sup>25)</sup>	神奈川県横須賀市	三浦一族居城
奴山 <sup>47)</sup>	福岡県福津市	古墳群(宗像君一族)
奴田 <sup>48)</sup>	和歌山県田辺市	200~250m 過疎化離村

日本山岳ルーツ事典<sup>42)</sup>では火奴山をひゃっこやまと呼び、その由来を沢の冷水にあるとする（真偽は不明）。

ヌカザス山は湿地があつて焼畑をしたことに因む名という<sup>42)</sup>。奴田ノ山は岩場とスズタケの藪山である（三角点選点と埋標は平成13年実施）。ヌタノ丸やヌタノ峠は低山で湿地と関係ありと考える。君津市奴田には小規模な城か砦、また大日堂と怒田神社（祭神や縁起など不明）がある。この地名の由来は水に係わる大蛇伝説にあり、干上がった沼を水田に転用したので怒泥田（ぬかるだ）と呼び、その後で怒田となったという。蛇は農業神、水神様とされ水と切り離せないが、因みに奴田山にも蛇石平に大岩と祠が存在する（南青木団地登山コース）。

興味深いのは大峰山である。山頂に奴田山大峰山龍王子があり、奴田山は大峰山山頂の字名である。低山ながら大峰山を觀請する修験の山であり、山中には12ヶ所の荒行場が点在する。そのひとつは二双の大岩が聳える奥の院の鎖場は最大難所である。

この他に湿地と関連する「沼」のつく山は全国で少なくとも10座以上ある。またヌタ（湿地）と修験との共存は特に珍しくはないと考える。

## へ 奴田山と修験道

会津の修験には磐梯、吾妻、飯豊などの他に天屋三峯が知られる<sup>26)</sup>。天屋三峯とは東山羽黒山、布引山、大戸岳を指す。回峯行の主たる経路は御山→吹矢山→淡路山→黒森→入小屋→大戸岳である。奴田山（青木山）でも麓山信仰の他に修験道に係わりがあり、これには奴田山から峰伝いに吹矢山へ至る道筋もあったといえよう。

石田<sup>3)</sup>によれば奴田山山頂へのルートは修験の道でもあり、天台宗の聖護院傘下の本山派修験に属し、これは奥州でも三大修験のひとつに上げられていたという。奴田山（青木山）に修験の痕跡を探すと、下記①が考えられる。しかし妙見を馬の守護神とする信仰もあり、妙見と山伏塚とを短絡的に関連づけられない（補足参照）。また次の②と③について確証はないものの、身近な修行の場や吹矢山への登路とも推論される。

- ①奴田山（723.3m）の南方に近隣する峰（724.5m）には山伏塚が3基現存する。
- ②地形図でも岩屋観音近くに岩場（峰石）の表記がある。子持ち岩、展望岩。
- ③岩屋観音のすぐ南、東西に走る枝尾根は短いものの、岩が露出し急な痩せ尾根である。

## ト 「ヌタヤマ」と「ドタヤマ」では何れが正しいか

重ねて奴と怒は当て字関係にあり、音が同じである。歴史的な漢字の読みからすれば、その伝来には呉音、漢音、唐宋音の時代的な順がある。遣唐使の派遣に伴い朝廷は漢音の普及を奨励した。しかし既に呉音が定着し優位を占めており、実際には漢音があまり浸透しなかったという。現在でも呉音は仏教や医学用語に多い。これはその証といえる。唐宋音の唐とは宋時代に伝来したもので、中国を表す唐土に由来する<sup>27)</sup>。

前述の奴と怒の読みは、両者ともに呉音ではヌ、漢音ではドである。古い時代にはヌと読んだことから、その当時既に山名があつたとすれば、ヌタヤマであつてドタヤマではない。

奴駄山の駄の音については呉音では「ダ」、漢音では「タ」である。推論ながら奴田山は奴駄山と表記され、その読みはヌダヤマであつたともいえよう。

## チ 「上ホシ山」は奴田山と同じか

前述の明治9年編纂の地図とは「岩代國若松縣第一大区全図」<sup>28)</sup>を指すと考える。確かに「岩代國若松縣第一大区全図（復刻版）」（以下本図）には「上ホシ山」との記載がある。

本図上で判読できる奴田山周辺の地名について、小田・青木から堤沢まで奴田・吹矢山系の西側を<sup>ただ</sup>糾してみる。

小田・北青木・黒岩・南青木・三ツ石・丸山・ハヤマ平・上ホシ山・ヲカ沢・羽黒平・妙見・御山・中ノ口・沼平・タテ山・堤沢・杉ノ平・羽山・十文字山などの記載がある。尾根の東側には院内・湯本・早倉・カラカサ岩・ソトクラ沢・セキノ沢・サイメー沢・川溪などの文字が読み取れる。また主尾根筋や支尾根にはケバ描きの無名峰が幾つかある。しかしながら「上ホシ山」は奴田山でない。

「上ホシ山」が奴田山であるか否かを確認するには、本図上で次の3点の検討を要する。

- ① 固有名詞（現在と同じ地名）の記載の確認。
- ② 「上ホシ山」と近隣の位置関係にある固有名詞（現在と同名）の確認。
- ③ ①や②で確認された2つの固有名詞（地名）間における、距離の確認。

「上ホシ山」の近辺を本図と地形図とで照合すると、奴田・吹矢山系の東側には湯本（東山温泉）、早倉やカラカサ岩（2.5万図での傘岩）の表記がある。西側には丸山・三ツ石が位置する。地図上の位置から「三ツ石」は「峰石」のことであり、丸山は岩屋観音の上に位置する「隠れピーク」と読める。地形図（2.5万図）では正しく「傘岩」と「峰石」が奴田・吹矢山系を挟み対峙する関係にある。

このことから「上ホシ山」は荒佐原山（541m）を含むより南方の無名峰（青木山登山・麓山コースと小田山コースとの合流点付近を含む）といえる。ただしこの無名峰は地形図で読み取る「隠れピーク」である。隠れピークとは地形図上で等高線が閉じていないが、周囲より小高い峰をいう。

③については3段階の手順を踏む。まず地図上に妙見・羽黒平・ハヤマ平などの地点を設定（想定をも含む）する。次に2地点を選んで、その距離を1組の尺度とする。さらに相異なる2組による尺度の長短を比較する。

地形図（2.5万図）における妙見は奴田山三角点（723.3m）の南方に位置する。そこで妙見は奴田山の南方にある峰（724.5m）であるといえる。本図から妙見に隣接するのは羽黒平であり、ハヤマ平ではないことも分かる。

ハヤマ平は小田の麓（ハヤマ）神社（荒佐原山）の周辺と読めるが、さらに「上ホシ山と妙見」および「上ホシ山とハヤマ平」について、本図上での間隔（距離）を比較する。その結果、前者の間における距離の方が後者のそれよりも明らかに長い。文献<sup>8)</sup>でいう上ホシ山が奴田山（723.3m）だとすれば、これ（奴田山）と妙見とは隣接する関係から近い筈であり、事実と明らかに矛盾する。この点でも「上ホシ山」は地形図上に記載された「奴田山」ではありえない事が分かる。

本図では妙見の北に隣接する無名峰があり、これに「ヲカ沢」が突き上げている。この無名峰が奴田山（723.3m）である。地形図との対照からヲカ沢は現在の宮沢上流である。

リ 「上ホシ山」は奴田・吹矢山系の何処に位置するか、またこの山名の指す意味は何か  
 奴郎ヶ前から南方を眺望すれば、奴田・吹矢山系での左肩に当る山域が目につく。この付近（およそ標高550m）が荒佐原山区（前述の砦跡）である。さらに尾根筋を辿ると小高い峰あり、その右には大きな峰が座る（青木山への麓山と小田山コースとの合流点）。

視点をかえて青木集落からこの合流点の峰を望めば、荒佐原山区の右に続く峰（隠れピーク）と分かる。さらにその右に幾分高くなだらかな三角形の峰（およそ標高660m）がある。この峰（隠れピーク）が「上ホシ山」である。

「上ホシ」とは何を指し意味するかについては、推測の域を出ないが、次の①と③は興味深い課題を提供する。

- ① 「上」が「神」と当て字関係にあれば、神ホシ山となる。そこで上ホシ山の峰や山腹には山神（青木集落の麓山神社）の祠が祭られていた可能性も生まれる。次の例もあり、当て字の可能性は否定し難いといえる。

\* 旧小田村での官林繪図面では荒佐原山を荒沢原山とし、「佐」に「沢」を当てた。これは当て字を用い



たために、山名の意味が変わった例である。

- \* 奴田山山麓に湧く「インの清水」の正しい呼称は、「入りの清水」である<sup>6)</sup>。この誤りの発端は文字の写し誤りや聞き違いなどにあるといえよう。

②<sup>うえ</sup>上ホシ山のホシを星に由来するとみる説。

月や星の信仰に繋がり全国的に例も数多いが、星座を拝するに特に奴田山周辺の条件が良いとは考え難い。

③<sup>うえ</sup>上ホシ山のホシをボウジの転訛とする説。日本山岳ルーツ事典<sup>42)</sup>によれば、ボウジとは領地の境界である尾根の意味とみられるとする。因みにボウジ杭とは境界杭を示す。星原山（福岡県、793m）や星ヶ尾山（宮崎県、412m）などはボウジからホシに変化したものであるという<sup>42)</sup>。「ボウジ」の「ボウ」と「ジ」を表すには漢字2文字を要する。漢字「ボウ」のへんは「片」、つくりが「旁」、また「ジ」は「示」である。以上から本説では<sup>うえ</sup>上ホシ山を境界尾根筋にある目立つ峰であると理解する。

又 「エホシ山」とは「<sup>うえ</sup>上ホシ山」のことか

本図の枠外に高山比較図と河川比較図が併記されている。この高山比較図（若松地）にはエホシ山の名がある。本図中にはその山の記載がないので、エホシ山と<sup>うえ</sup>上ホシ山との関連を推測すれば、以下の②には興味惹かれるものの、結果としてエホシ山と<sup>うえ</sup>上ホシ山との関連は分からない。

①エホシ山の名称がエボシ山のそれと同義だとして、烏帽子山であるとする推量説。

- \* 烏帽子山は烏帽子に似た形をしている<sup>29)</sup>。しかし青木・御山近辺の奴田・吹矢山系にはこの形の山（峰）は見当たらない。
- \* 湊町赤井にある烏帽子山（580m）は会津平から眺望するに難しく、該当しないと考える。
- \* 旧会津高田町と下郷町の境界尾根に烏帽子岳（1,095m）があるが、本図中にはその記載がない。

②<sup>うえ</sup>上ホシ山の「ウ」が転訛して脱字となり、エホシ山と記載されたとする推量説。

本図中で背灸山を背中アブリ山とするが、高山比較図では「セナカ」と簡略されている。これと同様に<sup>うえ</sup>上の「ウ」が脱字または省略され、上ホシ山がエホシ山となったとする。

③エホシ山と<sup>うえ</sup>上ホシヤマとは異なるとする説。本説が正しいとしても、なおエホシ山の存在位置は不明である。

高山比較図には他に羽黒山や猫山、高倉山などが記されている。本図中でエホシ山に隣接した描かれた猫山は、その位置からみて大杉集落近くに座する大杉高山である。両者が近隣の位置関係にあるとすれば、これは②説を推すといえる。しかし高倉山に該当する山は分からない。

奴郎ヶ前の「奴」との関連にも興味が湧く。かつてこの地には刑場があり、竹矢来で区切られていたという。「矢来」から「矢来が前」が生じ、それが転じて奴郎ヶ前となったとする。この説の真偽も不明である<sup>30)</sup>。

ル ヒダラハゲヤマ（干鱈兀山）は奴田山と同じか

会津風土記の御山村の項に次の記述がある<sup>14)</sup>。

- ④ 「干鱈兀山 村東三十町計ニアリ、高五十丈余、南ハ堤沢村ノ山ニ続き、北ハ南青木ノ山ニ連ル」。
- ⑤ 「沼二 共に村東二十五町、干鱈兀山ノ麓ニアリ、一ヲ雄トイヒ、一ヲ雌ト云、雄ハ周百二十間余、雌ハ周ニ二百三十間、相伝テ比沼ニ主アリ、芦毛ノ馬ナリト云フ」。

「沼二」とは、モリアオガエルの生息地とされる雄沼と雌沼のことである。この沼は干鱈兀山の麓にあることから、干鱈兀山は地形図（2.5万図）での無名峰（701m）といえる。「ハゲ」とは土壌や岩石が露出している処

を意味する<sup>15)</sup>。加えて干鱒元山の「元」とは、高くて上が平坦なさまを意味する。実在の山容がこの証といえる。

なお上ホシ山や干鱒元山が荒佐原山から奴田山(723.3m)を経て、さらに妙見(724.5m)を含む尾根筋一帯だとする説に対しては、次の論拠により難しく否定したい。

かつて山林原野などの入会地は、人々が生活を維持するための自給資源を得る場であった<sup>31)</sup>。入会地では他集落との土地境界紛争も起こるので、正しい権利を守り主張せねばならない。それには境界や領有権を図面や書類上で明確化する必要がある。対抗する上で土地や山地の名称に係わる詳細な記載は欠くことが出来ない。その例が旧小田村での官林繪図面にみられ、実際には峰続きの広範囲をひと山として捉える事の難しさが理解できよう。

旧青木村や御山村の官林繪図面と字限図を閲覧し得なかったが、旧小田村の官林繪図面(明治八年、複写)では小田山から荒佐原山周辺に山名と境界が詳細に描かれている(御徒萱山・太平山・峠山・風口山・赤坂山・白倉山・梨木山・松沢山など)。この官林繪図面(明治八年)には荒佐原山を荒沢原山とする当て字の記載がある。

### オ 青木山(青木)の名称

会津風土記<sup>36)</sup>には青木の地名を認めるものの、新編会津風土記(文化六年)には青木山の記載がない。そこで200年位前には「青木山」の名は普及していなかったとも推察される。ヒメアオキ生息に由来するとの推測説<sup>6)</sup>があるものの、青木山や青木の呼称が何時頃に生じたかは分からない。以下に関連文献を上げておく。

#### ○ 佐野氏随筆

青木山の名を歴史に残す資料として佐々木は佐野氏随筆を上げている<sup>32)</sup>。これは「若松市史」上巻 第四風俗篇(口碑伝説並に俚諺)に収められてある<sup>33)</sup>。その年代と筆者については不明ながら、青木山の名が「神山才兵衛の飯綱術」の項に出ている。以下に大略しておく。

土津公の時に神山才兵衛という飯綱術の使い手がいた。その家中に才兵衛と長年馴れしたしむ若者がおり、かねてから飯綱の術を伝授し欲しいと切に願っていた。

飯綱の法には六ヶ敷行があり、その修行を根気よく続けることが必要であった。これを危惧した才兵衛は若者に教えなかった。若者が再三再四の懇願した所、才兵衛は「それ程望むなら我に随行してみよ」、根気よく修行を続けることができれば教えると若者に約束をした。(中略)——、才兵衛と若者は青木山に行った。善龍寺境の山などを歩き(以下略)一。

#### ○ 戊辰若松城下明細図<sup>34)</sup>

戊辰若松城下明細図で調べたが、青木山の山名の普及は比較的新しいと推察する。すなわち明治二十八年十二月初版発行から大正五年八月訂正増補五版発行までの図面には見当たらない。しかし明治四十年八月訂正増補四版発行後、昭和四十九年二月三日改訂とする図面には青木山の記載がある(この改訂版には五版発行が未記載)。

#### ○ 葦名時代黒川城市図<sup>35)</sup>

青木村の記載がある。

#### ○ 地名の由来<sup>30)</sup>

「青木」の由来は不詳であり、他地域での「青木」とは人名と伝説によるものがあるとする。

○会津風土記（上）<sup>36)</sup>、会津風土記（下）<sup>37)</sup>、外四郡会津風土記下終<sup>38)</sup>

風土記（上）門田荘の項<sup>36)</sup>に南青木と北青木、同（下）<sup>37)</sup>には御山陂の地名が見える。「陂」とは堤や溜池を指す。また古蹟の項<sup>38)</sup>に「御山山壘云々」とある。

○会津大事典<sup>39)</sup>

門田町大字黒岩のうち北青木と南青木の東にある山地を総括して青木山といい、奴田山（723.3m）から北へ小田山（371.7m）までが青木山の範囲とする。字名については旧小田村の官林繪図面と同名の山々を記述している。

### 結びにかえて

視点を庶民信仰におくと上ホシ山、妙見、三ツ石などの名称は興味深い課題を提供する。本文に重複する部分もあるが、さらに若干の推論加えて今後の検討課題とし本稿の結びとしたい。

- ① 旧小田村での官林繪図面では荒佐原山を荒沢原山とし、「佐」に「沢」を当てた。これは当て字を用いたために、その意味が変わった例である。仮に「上」が「神」と当て字関係にあれば、神ホシ山となる。
- ② 上ホシ山のホシを星と読みかえると、天体崇拜（日・月・星に対する信仰）<sup>40)</sup>に繋がる。本稿で推測した上ホシ山の位置で星座を観測するには、立地条件が特に良いとは考え難いが、検討する余地があろう。
- ③ 上ホシ山のホシは「ボウジ」が転訛したもので、この山は尾根上にある土地境界目印となる峰を指すと考える。なお小田、青木、御山集落に関する官林繪図面や字限図などの資料で、これを裏付ける論考が必要である。
- ④ 上記の①に③を加味してさらに推し進めると、次の仮説を得る。すなわち上ホシ山は領地の境界となる尾根筋上に位置しており、この峰や山腹に山神（青木集落の麓山神社）の祠が祭られていた可能性がある。
- ⑤ 妙見信仰には北極星や北斗七星ばかりでなく、馬の守護神との係わり<sup>41)</sup>もある。これは妙見と駿馬、妙見と竜馬（名馬）の関係に根づく。会津風土記御山の項、「沼二」に芦毛ノ馬が沼の主との記載があるので、奴田山系の妙見においても馬や牧場に関して検討すべきである。
- ⑥ 「岩代國若松縣第一大区全図」中に「三ツ石」との記載がある。三ツ石明神（三石明神）は自然崇拜（奇岩怪石を神とする信仰）である<sup>40)</sup>。山頂にある自然石を神霊視する例は少なくない。殊に3個であることが重要視される。三ツ石を火の神とする信仰は風土記やその他にも現れて、すくなくとも日本民族の古代信仰につながるものだという<sup>41)</sup>。加えて火や竈神は荒神信仰に展開したとされる。しかし奴田山麓での「三ツ石」が火の神と関連するか否かは不明であり、今後の課題として興味深い。

### 謝 辞

本稿を纏めるにあたり教示と助力下された 石田明夫先生、佐々木長生先生、佐藤一男先生、渡部博信氏に深く感謝の意を表します。

### 補 足

◎山名の起源に関する分類<sup>22)</sup>

#### I 自然的な要素とその例

地形によるもの

丸山、烏帽子岳

方位、位置	朝日岳、日陰山、日向山
気象、気候	雲取山、霧ヶ峰
岩石、地質	赤石岳、水晶岳
動物、植物	蛇ヶ岳、浅草岳

## II 文化的要素とその例

宗教、信仰	愛宕山、権現岳、地藏岳
歴史	城山、物見山
民族、産業、雪形	燕岳、蝶ヶ岳
自然と関連した民俗	鳥越・雁ヶ腹摺山
アイヌ文化	アトサヌプリ、チセヌプリ

### ◎天屋修験回峰行<sup>26)</sup>

天屋三峯における修験回峰行には大回り和小回りがあったとされる。古い雨屋宮内の金峰山平楽寺による国峯修行は小回りで、大戸岳に攀じ登り布引山の西麓を回り東山羽黒山に出た。これを大和国多武峯に模し天屋三峯と称し、登拝口は慶山、滝沢、雨屋であった。小回りの経路は羽黒山→吹矢山→淡路山→高森山→大戸岳である。

その後南岳院による滝澤口からの回峰行となった。この経路が大回りであり、滝澤不動滝→東山羽黒山奥の院→背炙山→川溪→大巢子→一ノ渡戸→大滝→二幣地→布引山である。

### ◎妙見信仰<sup>44)</sup>

北極星や北斗七星を神格化した妙見菩薩に対する信仰で、馬の牧とともに展開した。北極星はネノホシ、ホウガクボシ、メジルシボシと呼ばれ、方角や時刻を示す。北斗七星中の第七星（破軍星、本地虚空蔵菩薩）は戦勝祈願と結びついて武士の信仰を集めた。

### ◎知られざる篤志家向き藪漕ぎ奴田山登路（奴田山と修験道の項参照）

藪漕ぎを覚悟、何事も自己責任かつ地形図を読めることが必須条件である。青木山登山路には5コース（小田山・麓山・団地・岩屋観音・学樹林）<sup>7)</sup> があるが、これらとは異なる。

- 1 奴田山と修験道の項③に述べた東西に走る枝尾根は北西に張出す尾根の隠れピークに突き上げる。  
（隠れピークとは地形図上で等高線が閉じていないが、周囲より小高い峰である）
- 2 地形図からみて岩屋観音付近の岩場（標高400m）から隠れピーク（標高530m）までの標高差はおおよそ130m、水平距離250m、仰角28° 斜面距離280m ある。
- 3 北西尾根を南東に方向に藪を漕ぐと団地からの登山路に標高620m付近で出会い、奴田山頂上に至る。

### ◎二系統ある田下駄<sup>17)</sup>。

①深田での田植えや稲刈り、泥湿地の芦刈などの作業に用いる（泥中に足の沈み込みを防ぐ）。板型、輪かんじき型、下駄型、足駄型などの主に小ぶりなもので、ナンバ、カンジキ、タゲタ、ブクリなどと様々な名称がある。

②代掻き、肥料の踏み込み、代直しなどに用いる。箕の子型、梓型、箱型などの概して大型で、オーアシと呼ぶ地域が多い。

猪苗代湖周辺の湿田地域では「なんば踏み」と称し、代（しろ）こしらえには板型の幅1ツルほどの横長の田下駄（ナンバ）だったという<sup>17, 45)</sup>。登呂遺跡出土のものは0.5ツルほどであるが、猪苗代湖周辺の田下駄に類似する。

- ③宮城県の方言に「うざにはぐ（仙台周辺）」や「うざぬはぐ（登米地方）」がある。「うざに」とは野良仕事での辛さや苦労を意味する。「うざぬ」は「うざに」の訛りで田下駄の一種である<sup>46)</sup>。

◎会津における湿地農耕用具と労働力軽減化法（田舟や田下駄を除く、文献<sup>52)</sup>より抜粋）

古く会津における農耕は主として沼地で行なわれた。以下に湿地労働での省力化法（道具、用具）を記す。

- ① 大木（ハンノ木など）を田圃に沈めこれをつた伝い渡る。
- ② 山野で刈り取った若芽や若草を田圃に敷き入れて伝い渡る。これをカッチキ（刈敷）といった。
- ③ 機械（テイラー）が導入された乾田に対して、湿田（ヒドロ田）では苗代作りから植代までハッタ（ゴロゴロ）を用いて代掻きをした。ハッタとは棘状突起のつくローラーを人力で転がし耕すものであり、終戦後から昭和40年頃まで用いられた。

◎会津地方に名を留める谷地（文献<sup>52)</sup>より会津地方のみ抜粋し一部変更、旧市町村名）

河沼郡	湯川村	水谷地、上田谷地
河沼郡	会津坂下町	大田谷地
河沼郡	河東村	岡谷地
大沼郡	会津高田町	谷ヶ地
耶麻郡	猪苗代町	蒲谷地、廻谷地
耶麻郡	北塩原村	谷地
南会津郡	南郷村	谷地
会津若松市	湊町	赤井谷地
喜多方市	豊川町	新井田谷地

谷地平の地名（その他も含む）を2例加えておく（筆者）。

会津若松市大戸町大字高川字谷地平（林道谷地平線、未開通）

吾妻山の山中にある湿原、谷地平（谷地平小屋）

◎「岩代國若松縣第一大区全図」<sup>28)</sup>について

南会津山の会創立30周年記念事業として限定60部復刻されたが、複製複写厳禁である。

会津若松市立図書館に所蔵されている（館内閲覧）。

・本図の凡例から一部を抜粋。

一 本図ハ在来ノ與地ニ依ラス實測創製スル所ニシテ明治六年ニ業ヲ起シ同ニ功ヲ畢フ其舊図ニ異ナル頗ル多シ

一 本縣管地分劃四大區タリ因テ毎大區一幅トナシ四帙ヲ合シ以テ全管地ノ形勢ヲ觀ル亦披覽シ易カラシク欲シテナリ

・復刻版の序文から一部を抜粋

岩代國若松縣は明治六年一月二十七日、従来五十七区あった区画割を四大区画に改められた頃、現地調査に入り明治九年まで約四年の歳月を要したと記録されています。

若松縣全図4面のうち現存が確認されているものは、岩代國若松縣第一大区全図（南会津郡、北会津郡全域と安積郡のうち湖南地区）と岩代國若松縣第三大区全図（耶麻郡のうち喜多方と西会津および西蒲原郡の津川地区）の2面だけで「大二大区全図」（大沼郡河沼郡）と「第四大区全図」（耶麻郡のうち猪苗代と安達太良山吾妻山）の2面がいまだに所在が確認されていません。

## ◎青木山と青垣山

[大和は国のまほろば たたなづく青垣山 こもれる大和し美はし] 古事記

大和平野（奈良盆地）を囲む山地はその昔から青垣山と称されている<sup>50</sup>。これに倣い本学の学歌にある「青垣山」は特定の山（青木山）を指すものではなく、会津盆地の周りを取り巻く峰々の連なりであると解釈できよう。青垣山の名が神話にあるとする文献<sup>40</sup>があり、この抜粋を参考に供したい。

かくて大己貴命が海を望みて大いになげきたまふ時、白装束した靈神が波の穂に立ち、命が汝何の神だ問たまふに答えて、我は汝が幸御魂奇御魂である。我を大和の青垣山山の東山の上に齋き祀れと仰せられたから、命は大和に出て、これを祀られたのが今の大和の國磯城郡三輪にある官幣大社大神神社で、拝殿のみあって社殿はなく、直に此山を祀って居る三輪明神である。

## 文 献

- 1) 会津百名山ガイドダンス，福島県会津保健所・南会津保健所，歴史春秋社，平成10年。
- 2) 石田明夫，小田山城跡－会津葦名氏本拠の山城跡，縄張り調査報告－，会津若松市文化財調査報告書，第105号，会津若松市教育委員会，2005，3，門田条里制跡，古代・中世，水田の方形区画跡。
- 3) 石田明夫，小田山城跡－会津葦名氏本拠の山城跡，縄張り調査報告－，会津若松市文化財調査報告書，第105号，会津若松市教育委員会，2005，3，奴田山山頂へのルートは修験の道でもあり，天台宗・・・南北方向に3基存在(p-15)，どたやま(表1の小田山城跡)(p-46)。
- 4) 石田明夫，青木山賛歌，歴史・民俗の中間報告・第2集，青木山を守る会，2011，2，どたやま(p-16～19)。
- 5) 石田明夫，小田山城，<http://www/7.ocn.ne.jp/~aizua/page024.html> 2011/11/10 16.24
- 6) 滝澤洋之，会津人群像，特集 会津の中世，no. 9，80～90，平成19年6月30日，五〇年前の青木山の遠足を再現して：ヌタヤマ なぜそういう名前がついたかわからない。笹川氏の説，滝澤説（ヒメアオキの生息）。
- 7) 滝澤洋之，青木山賛歌，青木山を守る会，平成22年2月22日，ニタラハグ山，上ホシ山，明治9年の地図(p-4)。
- 8) 滝澤洋之，青木山賛歌，青木山を守る会，平成22年2月22日，青木山の麓山信仰(p-36～39)，登山コース紹介(p-16～19)，青木山にいだかれた人々(p-86～102)。
- 9) 日本山岳ルーツ辞典，監修池田末則，編者村石利夫，竹書房，平成9年12月5日（初版発行），奴田山（ヤッコダヤマ）：ヤッコとは地形語で谷地をもつ山(p-335)。吹矢山や吹屋山：フキヤとは峰が“矢を吹いた形”つまり尖端が鋭く尖った形をしている山(p-330)。
- 10) 開発を待つ地下資源，福島県総合開発局，朝日鉱山(p-155)，石ヶ森鉱山(p-154)，1954。
- 11) 日本民族大事典（下），編集福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄，吉川弘文館，2000年4月20日初版発行，ヌタ：地名，沼田，奴田，怒田などと書く。ノダやムタも同義，ニタ（仁

- 多・仁田・似田など）もヌタと同系の地名（p-298）。ムダ：湿地を意味する地名，ムタともいう。ノダ（野田）・ムタ（沼田）・ニタ（仁田）・ウダ（宇陀，宇多）なども同義，九州には牟田と書く地名が多い（p-669）。
- 12) 日本民族大事典（上），編集福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄，吉川弘文館，2000年4月20日初版発行，アワラ：湿地を意味する方言および地名，芦原温泉で知られる芦原や各地にある阿原」も同義（p-56）。
- 13) 岩科小一郎，山岳語彙－登山者のために－體育評論社，昭和15年6月25日発行，山岳新書，ヌタ：甲州に多い地名，山腰又は尾根筋の平地を云う。其処に聚落があれば，大岱，岱の如く字名となる。野田と転じて黒野田，野田尻などともなる。ヌタの本来は山中の湿地で，猪のヌタバで知られたヌタ，またはニタという語から出ている。猪が身を冷やすために泥土を掘り返す湿地は関東ではヌタバ，関西と東北ではニタバと云う。三河の山間部では猪の角力場とも呼ぶ（p-125）。ハゲ：樹木なく土壤岩石を露出せる所（p-127）。アハラ：発音はアワラ，関東から中国の一部にかけては山中の湿地の意（山村語彙），信州安曇地方では沮洳地の意，北飛騨では浸水し易き低地（北飛騨の方言）（p-54）。
- 14) 新編会津風土記，第2巻，平成12年3月4日発行，阿倍隆一，歴史春秋社，ヒダラハゲヤマ（p-145），沼二（p-146），ヌタノ原山・大巣子村（p-130），金の採取（p-30），金堀村（p-28），吹屋川（p-29），吹屋山（p-25），金堀小屋・石盛（p-18）。
- 15) 大巣子スキー場広告紙，1988.12.7，OPEN，東山リゾート開発（株）・東山観光協会・東山温泉旅館協同組合。
- 16) 佐々木長生，門田条里制跡出土の田下駄について（門田条里制跡発掘調査報告書），p-87～93。会津若松建設事務所・会津若松教育委員会，1990年3月。  
佐瀬与次右衛門，会津農書，会津地方での田下駄に関する史料として貞享元年1684，が最も古い。
- 17) 佐々木長生，福島県内の湿田農具－田下駄を中心に－，福島県博物館紀要，第8号，p-87～106，福島県立博物館，平成6年3月31日発行。
- 18) 校注執筆：庄司吉之助・長谷川吉次・佐々木長生・小山 卓，日本農書全集第19巻 会津農書・会津農書付録，p-43～49。農村漁村文化協会，昭和57年。
- 19) 庄司吉之助編書，会津風土記・風俗長，巻2，貞享風俗帳，p-154～157，吉川弘文館，昭和54年11月。
- 20) 門田条里制跡調査報告書V，会津若松建設事務所・会津若松教育委員会，会津若松市，門田条里制跡におけるプラント・オパール分析，古環境研究所，p-48～55，1995年3月。
- 21) 奴田ノ山，<http://www.geocities.jp/kyoketu/5843.htm> 2011/11/09 21:01
- 22) 日本山名事典，三省堂，編集委員 徳久球雄・石井光造・武内正，2000年4月。ヌダノ峠・ヌタ丸・奴田山（ぬたやま，やっこだやま）（p-798），火奴山（p-936），山名の起源（p-115～116）。
- 23) 奴田山大峰山，<http://www.geocities.jp/marusyou03/sub2.htm> 2011/11/06
- 24) 奴田（ぬだ）城，君津市奴田，<http://homepage3.nifty.com/yogokun/nuda.htm> 2011/09/30 14:10，<http://www.geocities.jp/marusyou03/sub2.htm> 2011/11/06 21:29
- 25) 奴（怒）田城，横須賀市，<http://d.hatena.ne.jp/charihiro/20111025/1319539564>  
<http://joe.ifdef.jp/004kanagawa/032nuta/nuta.html> 2011/11/10
- 26) 梅宮 茂，東北霊山と修験道（月光善弘編），p-545～551，名著出版，昭和52年6月（初版），山岳宗教史研究叢書7。
- 27) 高島俊男，ことばと文字と文章と お言葉ですが・・・別巻4 呉音と漢音，p-37～49，連合出版，2011年9月10日発行。

- 28) 岩代國若松縣第一大区全図, 南会津山の会復刻版(創立30周年記念事業, 限定60部), 目黒實(原図所有者), 本図の複写・複製(コピー)は厳禁, 中日本写真工業株式会社(印刷), 昭和62年3月, 会津若松市立図書館所蔵.
- 29) コンサイス日本山名辞典(修正版), 烏帽子山(p-67), 三省堂, 昭和54年3月.
- 30) 地名の由来, 地名の由来冊子出版部会編, p-96, 平成2年3月会津若松教育委員会, わかさ印刷.
- 31) 酒井 淳, 会津の民俗, 23, p-2~13, 会津民俗研究会編, 1993.3.
- 32) 佐々木長生, 青木山にいだかれた人々(講演会資料), 2010.11.07, 於福島県立博物館.
- 33) 若松史, 上巻, p-847~848, 名著出版(復刻版, 限定300部), 昭和49年.
- 34) 戊辰若松城下明細図, 会津若松市立図書館所蔵.
- 35) 石田明夫, 小田山城跡-会津葦名氏本拠の山城跡, 縄張り調査報告一, 会津若松市文化財調査報告書, 第105号, 会津若松市教育委員会, 2005, 3, 葦名時代黒川城市図に青木村の記載あり(p-28).
- 36) 会津増風土記・門外土記(上)(写本), 1674. 門田荘の項に北青木, 南青木の地名記載あり.
- 37) 会津増風土記・門外土記(下)(写本), 乾飯澤, 御山陂の記載あり.
- 38) 山崎嘉謹跋, 外四郡会津風土記下終(写本), 延寶2年仲秋, 古蹟の項に「御山山壘云々」と記載あり.
- 39) 五十嵐勇作, 会津大事典, p-44, 会津大事典編纂会, 国書刊行会, 昭和60年12月.
- 40) 加藤咄堂(熊一郎), 民間信仰史, 青垣山山(p-79), 信仰対象(p-443~444), 丙午出版社, 大正14年9月.
- 41) 大護八郎, 石神信仰, 三ッ石(p-220~226), 荒神(503~513), 妙見(910~911), 木耳社, 昭和52年7月10日.
- 42) 日本山岳ルーツ辞典, 監修池田末則, 編者村石利夫, 火奴山(p-330), ヌカザス山(p-469), 星ヶ尾山(p-1017), 星原山(p-985), 竹書房, 平成9年12月5日.
- 43) 武内正, 日本山名総覧, 奴可難山(p-18), 怒塚山(p-324), 白山書房, 1999年3月.
- 44) 日本民族大事典(下), 編集福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄, 妙見信仰(p-625). 吉川弘文館, 2000年4月20日.
- 45) 民俗収蔵資料, 福島県立博物館,  
[http://www.general-museum.fks.ed.jp/03\\_gallery/06\\_minzoku/06\\_minzoku.html](http://www.general-museum.fks.ed.jp/03_gallery/06_minzoku/06_minzoku.html) 2011/11/30
- 46) 宮城県北部(登米市)の方言, <http://www.dl.dion.ne.jp/~deramusi/page4.htm>  
2011/08/31 21:00
- 47) 新原・奴山古墳群, <http://city.fukutsu.lg.jp/kankou/guide/shinbaru.php> 2012/01/12/ 12:57
- 48) 奴田, [http://www.aikis.or.jp/~kage-kan/30.Wakayama/Hongu\\_Nuta.htm](http://www.aikis.or.jp/~kage-kan/30.Wakayama/Hongu_Nuta.htm) 2012/01/12
- 49) 小倉美恵子, オオカミの護符, p-26, 新潮社, 2011年12月.
- 50) 青垣の山, <http://santatei.com/tabii/1900/miwasan.htm>
- 51) 中地茂男, 川溪(かわだに)-東山ダム建設に伴う水没部落 民俗調査報告書, p-59~65, 昭和49年3月, 会津若松市立図書館所蔵.
- 52) 鷲尾義雄, 会津の民俗, 4, p-11~15, 会津民俗研究会編, 1974.2.